UIFA JAPON NEWSLETTER

No. 98 Aug. 25, 2014

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

■主な内容

・UIFA JAPON 2014 年度通常総会
・総会記念講演―陣内秀信氏講演報告
　「歴史を踏まえた水都の再生と創造」
・建築家が自らの “すまい” に求めたものを訪ねる
　中原邸と土浦邸
・会員の活動―地域で、職場で―
・被災地通信（9）
・会員の本
　『初めてのマンションベランダ緑化』
　『語り伝える戦時下の暮らし』

7 月 19 ～ 21 日、岩手県大船渡市のカメリアホール（盛町）と碁石海岸レストハウスで、被災地復興支援の「囲碁まつり」が開催された。地元の石鍋さん（左端）と企画した木谷さん（右端）の間に座る百面打ち等に参加された棋士の方々（上）。UIFA JAPON からは、「どこでもカフェ」の一隊がお茶道具や手作りお菓子を携えて参加し好評であった。合言葉は「エィエィ、ゴー！」（下）。（写真：岩井紘子）

UIFA　JAPON　2014 年度通常総会
UIFA Japon 2014 General Meeting

林屋　雅江
HAYASHIYA Masae

2014 年 6 月 28 日（土）13：00 から、法政大学市ヶ谷田町校舎において、UIFA　JAPON の総会が開催され、引続き法政大学デザイン工学部教授・陣内秀信氏による記念講演が行われた。

第 21 回 2014 年度総会

正会員 79 名中出席 24 名、委任状提出 26 名で定足数を確認、総会開催が成立。開会宣言で正宗副会長は遠方からの会員に労いの言葉を、開会挨拶の松川会長は、東北支援活動の御礼と今後の協力を要請した。議長・松川会長により議事が進行され、まず同会長より 2013 年度の活動報告があり、東北支援、20 周年記念のド・ラ・トゥール特別名誉会長の東北視察、モンゴル世界大会（15 名）の参加が報告された。また会計報告、新役員選出の報告、2014 年の活動計画と会計予算が各案とも承認された。

新体制でスタート

今年度は理事や委員の交代があり、新体制は右図のとおり。また役員会は 2 ヶ月に 1 回の開催になった。「この指とまれ」の建物見学などを増やす計画。

第 18 回世界大会は米国・ヴァージニア工科大学に内定

2015 年来夏、ブラックスバーグ・ヴァージニア工科大学にて世界大会が行われる。開催準備に日本支部も協力していく。

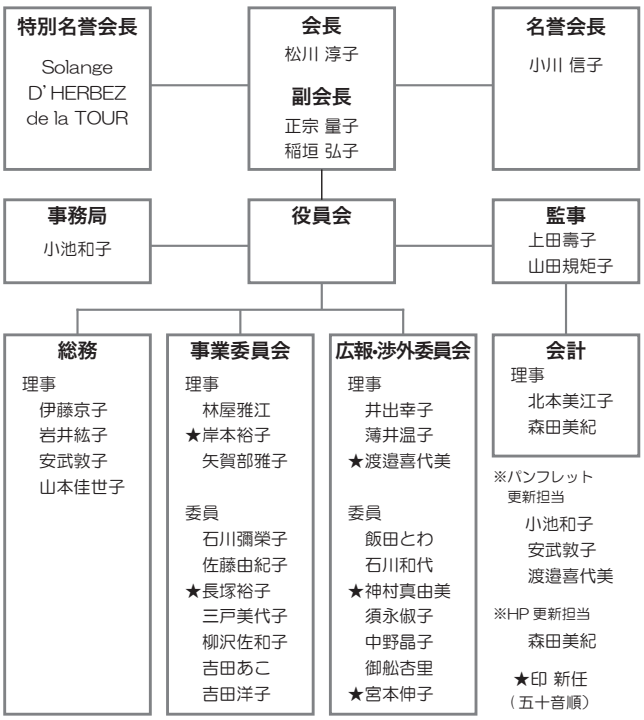
被災地支援活動「どこでもカフェ」は継続、拡大

東日本大震災より 3 年が過ぎ変化が出てきている。岩手県岩泉町の「どこでもカフェ」は、住民による「自主カフェ」を岩手県建築士会女性委員会メンバーの協力を得て行うことになり、テント等の大型道具類が役場の小本支所に贈呈された。郡山や大船渡などの「どこでもカフェ」は継続中。また他より依頼が入るなど活動は拡大している。

「東日本大震災　岩泉町　復興の記録　その 3」の完成に向けて

「だれでもフォトグラファ」で撮影した写真を中心に掲載されるので、「フォトグラファ」の皆さんにも気合いが入る。「だれでもフォトグラファ」は継続されるが、住宅再建などで仮設より移転される方との連絡体制をつくり今後の組織化を推進していく。

UIFA JAPON 新体制



第 61 回海外交流の会のお知らせ

講師：稲冨　昭（いなどみ　あきら）氏
タイトル：『人間と都市』（仮題）
日時：11 月 15 日（土）　14:00 ～
場所：淀橋教会　新宿区百人町 1-17-8

来年の、ヴァージニア工科大学にて開かれる第 18 回 UIFA 世界大会にむけ、ヴァージニア工科大学に留学経験を持ち、グロピウスの薫陶を受けた氏に、同大学の建築教育などについてお話を伺います。

「歴史を踏まえた水都の再生と創造」- 欧米都市と東京を比較して - 陣内秀信氏講演報告

板東みさ子

JINNAI Hidenobu, "Comparative History of Waterways in Tokyo and Western Cities"

BANDO Misako

講師：陣内秀信氏

講演は「以前 UIFA の開催した『ぶらり法末 花の旅』の企画の折、夕陽に映える日本ならではの美しい棚田の風景を足湯小屋で体験した。」とのお話から始まった。

水辺・水路から読み解くと都市が見える、これは世界の多くの都市で言えることであり、調べるほどに発見があり興味が尽きない、とのことである。

水の都市の成り立ちと分類

各都市の歴史によるが、発展に伴い物流の中心としての水路には要所に倉庫やドック等ができ、生活を支え賑わいの文化が生まれる。歴史ある欧州の都市では水運が網目状に発展した内港による港町が水都となるが、アメリカの場合は外港である。いずれにせよコンテナ輸送の時代にそれらの場所は中心からはずれ、衰退する。忘れられた場に復活再生の息吹を与えるのはアーティストや建築家だ。コンバージョンを経て生まれ変わったヴェネチア・ロンドン・ハンブルグ・アムステルダム・マンハッタン・ボストンなどの事例が比較解説された。内港と外港ではその再生の形は異なっている。

東京の水都の特性と今後

歴史ある東京には回帰できる水の文化がある。

江戸の生活は内港としての多くの水路に支えられた。変貌の激しい東京でも水路や道の形は、江戸時代のままのところが多い。スカイツリーから西を見る景観は、浮世絵の景色と重なり合う。水辺の様々な彩りある生活文化や楽しみは、高度成長期の人口過密や水の汚染のため喪失したが、今、再生の時を迎えている。日本の水辺はエコロジーと歴史の２つの要素を持つ。また宗教的な場としての祭りの空間もある点は欧米とは異なる。

大川端の再開発等の水辺はアメリカ的な超高層＋親水堤防だが、元来歴史ある水都東京では、ヴェネチアやアムステルダムのように、高層でない水辺の佇まいに船を係留し川に降り立つ風景が似合う。しかし現状では係留許可が厳しく、実現は、ごく僅かだ。

飯田橋外濠にある CANAL CAFE（後藤新平の後押しで開設）では水上コンサートにより、水と緑に囲まれ舟上から音楽を楽しむ機会を設けている。

各人が水辺の居心地の良さを体感してこそ、水都再生への動きは確かなものになる。過去から未来までを融合させる夢の空間としての水都を目指している。

会場より質問

日本橋や、中央区のふるい橋と船の高さの問題など、東京の川と橋に関する幾つかの質問に、お答えいただいた。また、2020 年の五輪までに解決すべきとして挙げられたのは、外濠の夏場の臭気をなくす対策、そして水上バスの活用（駅を陸上交通の駅と乗り換え易く近くし、共通チケットにする）などである。

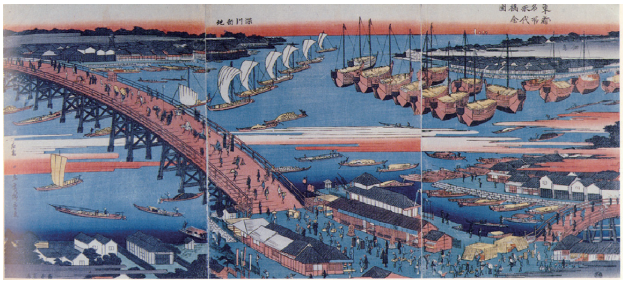
東京は、建築物が多々新しくなっても、時に閉塞感を覚えるが、彩りある生活に多様なさわやかさを見つける日々を育むために、水の文化を再生し、活用する価値は大きい。

東京の成長を磨く余地は、そこにある、と感じた講演であった。

右：CANAL CAFE で開催される水上ジャズコンサート。舟上で風を感じつつ音楽を楽しむ。陣内氏が所長をつとめる「エコ地域デザイン研究所」が外濠を活用し、街の活性化を図ることを目的に、毎夏開催。今年も第 8 回が 7 月 31 日に行われた。（写真提供：法政大学エコ地域デザイン研究所）

内港都市として水網の発達したヴェネチアの水路は現在でも日常の重要な交通網として活躍している。運河沿いの邸宅がホテルに或は住宅や倉庫が新しい展示空間にと周辺の建築もコンバージョンし活用されている。（写真：陣内秀信）

ロンドン・リージェント運河。産業の発展に伴い使命を失った水路周辺は一度は荒びれ麻薬密売等の問題の場所となったが、当時の曳航する馬の歩く道が、今は憩いの場に再生され、犬との散歩道となっている。（写真：陣内秀信）



広重「東都名所永代橋全図」都立中央図書館蔵。佃沖には各地から大型廻船が集った 。内港都市の特徴として大型船から小舟に荷物を載せ換えていることが読み取れる。

神田川クルージング。江戸からの水辺の文化や楽しみの再生が進めば、このような楽しげな様子が日常的に見られることになる。（写真：鈴木知之）

「この指とまれ」企画 2014 年 4 月 5 日～浦和の中原暢子邸を尋ねて～
Visit to the Nakahara House in Urawa

上田　壽子
UEDA Hisako

ＪＲ浦和駅から歩いて 15 分ほど、閑静な住宅街の中に中原暢子邸がありました。「暢庵」の扁額があり下見板張り風の和モダンな住宅です。中はどうなってるのか…ちょっとドキドキする外観です。（1986 年完成）

お家の構成は外観からは想像できない和風で、１階に３つの茶室と水屋、台所からなり、２階に個室と納戸、浴室などプライベート空間になっています。

玄関を入ると正面にクロークが設けられています。『お茶室に荷物を持って入ったらダメよ』というお声が聞こえてきそうです。左に曲がると応接室があり、それが待合も兼ねています。外壁のすぐ西に腰掛待合があり、露地へと導かれています。刀掛け、塵穴もあり本格的な設いです。一番奥に二帖台目切（出炉）のお茶室があり、躙口の正面に半帖の下座床が拝見できます。天井は一部掛込天井となり、腰張りは湊紙が貼ってあります。点前座正面には二重棚、風炉先窓があり、小間ながら給仕口もあり、連子窓も多く明るいお茶室になっています。また茶道口横に二帖の水屋もあり、使いやすそうなお茶室です。

広間は８帖、８帖続きの間二室。それぞれが床に工夫を凝らし、大らかなお茶室です。この二間は天井が吹き抜けになっており、紙張り障子を通した（であろう）サイドライトが印象的です。（障子は外されていました）広間の蛭釘が梁から丸太を持ち出し、そこに取り付けられてあり面白いなあ‥と皆のカメラのカシャカシャ音。これは茶道家であり建築家である中原先生の考案ですね！

その隣に６帖の水屋、８帖の台所と続きます。この台所は業務用のような流し台も造りつけられてあり、お茶事にも活用されたことが伺えます。ここで料理人を招いてのお料理教室も開かれたそうです。

名古屋にお住まいの姪御さんのご案内で拝見しましたが、その空間に座ってみて中原先生ご存命の折にお伺いすることができたらなあ、お尋ねしたいことがいっぱいあったのになあ…と思わずにはいられないすばらしい空間でした。

中原邸茶室広間とひる釘（写真：井出幸子）

「『土浦亀城と白い家』著者：田中厚子」の亀城・信子自邸訪問の記
Atsuko Tanaka, Author of "Within White Boxes: The Architecture of Kameki Tsuchiura"

渡邉喜代美
WATANABE Kiyomi

鹿島出版会　2014 年 5 月 30 日発行

五反田の土浦亀城邸を一度訪問したことがある。玄関からちょっとスキップして居間に入ったときに感じた豊かな感覚が今も残っている。56 ページに「すいやう会とダンス仲間」というくだりがあるが、若い時代に知的な様々な分野の多彩な顔ぶれが集って、おそらく大いに議論し、音楽とダンスを、ワインやティを楽しんだに違いないその雰囲気が伝わってくる。田中厚子が書く、“モダニズムという地平に向かって小さなボートを漕ぎ始めた”亀城は、自邸を創出するとき、そこで展開される近代的な人間関係の創造を空間に求めたといえるのだろう。記念的な建築では、こういう暮らしを体感する場にはなかなか出会えないものだが、ここは自分もまた議論の輪の中にいるような落ち着きを取り戻せる場であった。大事に住みつづけていることによって、人の気配が残像して体感したのだろうか。田中厚子の著書には人の姿が随所にあり、建築とともにくらしや人が描かれて、いわばその場の想像力が高まる。

確かあのときの訪問の契機は、“すみ続けてなお残す”その理想が貫けないものかと単純に思った訪問だった。何人かと私邸の保存という公共性について議論し、行く先の解決策を公共の側が持っていないものか、現場で考えていただこうと、東京都の担当にも来ていただいたりもしたのだったが、保存しつつ暮らすことへのサポートがほとんどゼロ施策だということを確認するようなものだった。

“建築として住宅の保存”には、気持ちよく暮らしながら保存できる新たな仕組みを創設するしかない！のかも知れない。

しかし、情熱と愛情をもって田中厚子は書いた。調べて書き残しておかないと何も残らないのが、日本社会の体質のような気がする。そして帯に格好良く“ル・コルビュジエよりも軽やかなモダンの美”と入れた。なるほど、ル・コルビュジエはどこかで理屈を考えるが、土浦邸には暮らしを支える率直な軽やかさを感じる。

「同潤会大塚女子アパートメントハウスが語る」「小さな建築」以来、ここしばらく“建築”を語らうことなく日々が過ぎた。街中で展開されるおびただしい建設物に、ため息をし、時を経て落ち着きを感じさせる街並みや建築が破壊されるたびに青臭い怒りを感じるこのごろ、そんな喉が渇く日常に、著書「土浦亀城と白い家」は“建築”って、あーやっぱり楽しいなーと感じさせる。みなさん、まずは、ぜひご一読を。

長く住み続けられる家に
Homes that Promote Longevity

谷村 留都
TANIMURA Rutsu

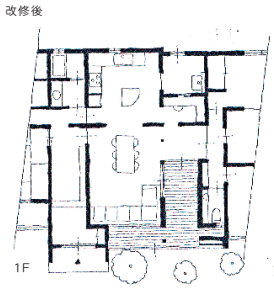
還暦は厄年といわれますが、それを実感する昨今でした。

仕事量が減ったのを幸いに、こんな時こそ気になることをやりたいと女性設計者の仲間達と「高齢者居住環境研究会」と銘打った勉強会を始めました。住宅設計を長くやっていると、進化する部分もあるけれど、安易に流れてしまう部分もある。建築主の要求を満たし、予算内でまとめることは当然のことであるが、果たしてその住宅に汎用性があり、時間の経過の中での問題はないかという疑問がきっかけの一つです。

この研究会で、介護保険の要支援認定者のうち単身か夫婦で生活している人にアンケートを取り（有効 107 名）、その後訪問して生活ぶりを観察するとともに書き取った間取りを分析しました。名古屋市郊外のごく普通の住宅や集合住宅、合わせて 71 軒を 2 人 1 組で訪問しましたが、その生活ぶりは、1 軒 1 軒にドラマと必然性があり、データーを分析してまとめられるようなものではありません。しかしそこで気付いたことはその後の設計において大いに参考になることでした。延床面積の大小にかかわらず実際に使用しているのは 50 ～ 60 ㎡前後、内容はさておき数値は北欧の高齢者住宅に近いことに驚くと同時に、1 階に和室と LDK、水回り、2 階は個室という一般的な住宅で、1 階の和室を寝室に転用している例を何件も見て、「予想通りだな」と納得したりであった。コアな部分をきちんと設計しておくと、そのまま使い続けることができそうだと分かったのは大きな収穫であった。

この時期の仕事は同世代のリノベーションが多かった。ここにあげる実例は結婚を機に両親が建ててくれた家を在宅時間が増える定年後が楽しくなるようにという趣旨の改修である。今注目されている、QOL 向上のためともいえる。

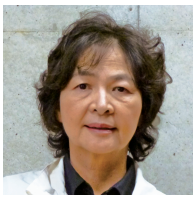
今年になり徐々に新築の仕事が増えているが、若い建築主の要望にうなずき、その 40 年後をひそかに想像しながらさりげなくトイレの位置などを計画するこの頃です。



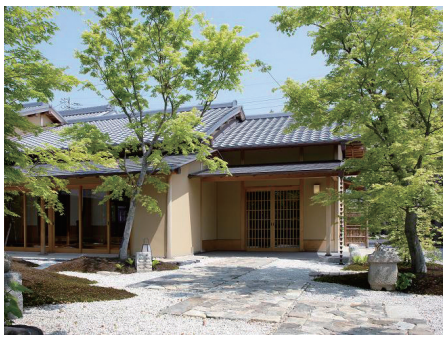
上：改修後平面図
下：２室に分断されていたＤＫとＬを一体化した。深く切り込まれたデッキテラスは家の中と外を繋ぐだけでなく、近隣との交流の場にもなった。

地方都市での仕事「縁」
Making Connections Through Work

伊藤　京子
ITO Kyoko



設計事務所を開設して 35 年。ほとんどが住宅の設計監理でした。独立してはじめての仕事は同じ町に住む友人からの依頼で、ご主人の故郷に二世帯住宅を建てるというものでした。建設中は幼児 2 人を連れて、車で片道 2 時間の道のりを通いました。今でも、その道を通るとここでおしっこをさせたなとか自販機でジュース買ったなど思い出して頬が緩みます。子供を連れての仕事は施主や業者の理解があったからこそで恵まれていました。比較的、近隣の仕事ばかりしていましたが、紹介で遠隔地の仕事をするとその縁でまたその近くの仕事へと広がり、またまた遠くで仕事となりました。このようにして紹介で仕事が続き、昨年は最初の施主であった友人のご子息から注文を受けました。親子 2 代にわたっての受注は本当に嬉しいものです。また、現在、建設中の 2 世帯住宅は他県にも拘らず偶然にも注文者の親が高校の同級生でした。施工業者の社長も同級生で下請け業者にも同窓生等がいて現場はまるで同窓会状態。楽しんで現場へ行っています。振り返ってみると恵まれた環境で仕事も子育てもできたと感謝しています。数年前に神社の修復工事に携わりました。その時、今までの経験だけでは対処できない多くのことにぶつかりました。古い建物の修復、保存に今まで以上に関心を持ち、今では、「名古屋市歴史的建造物保存活用推進員」「あいちヘリテージマネージャー」の講習を受け活動をしています。その中の一つが名古屋市内に移築され料亭として使われてきた合掌造りの建物「白雲閣」の保存・活用です。活動費がないので参加費を集めての家の掃除・障子張等ですが、見学だけでは気づかないところに目が行き、勉強になります。大学の教授・学生の協力も得て建物調査はしたのですが、保存や活用となると持ち主の意向や費用の問題が大きく立ちはだかり前へ進みません。目下悪戦苦闘思案中。今までの経験が少しでも社会に還元できたらと思う今日この頃です。



日本建築の良さを伝えることが私の仕事の底流にあり、平成２０年竣工Ｓ邸は、私自身として上手く伝えられた仕事だったと思います

建物を創り、庭を読み解く
Building Design and Consideration of Gardens

御舩　杏里
MIFUNE Kyori

単身者用社員寮「オーク千種」の建築設計に携わった。テーマは「太陽の恵みを享受し、自然の中で住まう」。5階建、床面積約4,600㎡、名古屋市緑道に面した静かな住宅地に建つ。大食堂・大浴場・ラウンジと、個室にトイレ・ユニットバス・ミニキッチンを備える。個を大切にしつつ、人の緩やかな連携を導く。寮生活で世代を超えてネットワークが構築され、職場内の活性化につながることを願って、寮が見直されている。災害時には防災拠点ともなり得る。防災トイレやかまど、充電ステーションを準備し、地元自治会と協力して地域づくりを進めている。5階屋上に太陽光パネルと太陽熱パネルを載せ、太陽の恵みを電気とガスに変えて、120人が暮らす建物を運用。2階屋上の共同菜園で、ナス・トマト・キュウリ・ジャガイモ、そしてミツバチの箱から蜂蜜を収穫、大食堂の食卓を彩る。育て、収穫し、食べることで、喜びと共に小さな地産地消を実現。

学習会「庭園倶楽部KYOTO」、京都造形芸術大学通信制大学院在学中に、尼崎博正教授指導のもと、2007年度第1期生8名で立ち上げた。持ち回り幹事で、年3回、現在計22回開催、各地より20名前後の参加。第1回は京都東山裾野に位置する碧雲荘庭園。一幅の絵巻物のように寝姿の東山を借景とし、琵琶湖疏水水源の流れが大池をかたちづくる、近代庭園の幕開けとなった植治（七代目小川治兵衛）の庭。庭の骨格の雄大さと、周辺から閉ざされた野山の風情はまさに別天地。人は、原地形を読み取り、庭（活動風景）を創ってきたのだ。今も痕跡が残る飛鳥時代の庭から京都市街地のビル内部に作庭された庭まで、京都を中心に滋賀、奈良、そして北は仙台、平泉から、南は九州、熊本まで各地に足を延ばす。集う仲間の数だけ、庭を巡っての思索がある。その時代の感性、空間把握、作庭者の美意識が、庭の骨格と仕組みに宿る。共に歩き、感じ、語り、読み解く。その時々に新しい発見があり、次なる創造へ脈々と継いでいく。

オーク千種　1階大食堂から2階ラウンジへ出会いをつくる見通しのよい大空間

「読売ランド前駅周辺まちづくりプロジェクト」について
Redeveloping the Yomiuri Land Station Area

佐藤　由紀子
SATO Yukiko

多摩区都市マスタープラン策定委員会で構想策定を協同した方と二人で、住民発意のまちづくりボランティアグループ《読売ランド前駅周辺まちづくりプロジェクト（通称:ランドプロジェクト）》を結成して9年になります。イベントを通じて地域ネットワークを構築する【ソフトの活動】と、まちづくりを考える場の【ハードの活動】を軸として、事務局メンバー（地域住民・商店主・日本女子大学＋附属高校の教員と学生）が会費制で活動しています。

最も地域に根付いている活動は【地元オリジナルブランド商品】の開発です。「学生」のアイデアを「地域住民」の助言と「店舗」の技術力で、ここでしか入手できない商品として実現し、買いに来てもらおうというものです。地域の人の輪をつくり、人々に関心を持ってもらう事を意図しました。「全国推奨観光土産品」や「かわさき名産品」認定となって地元に愛される銘菓もいくつか出来ました。「商店街の為の活性化」ではなく、住民が「まちづくりの一環」として企画した試みは様々なメディアで報じられました。【フラワーバスケットワークショップ】は参加者が作ったフラワーバスケットを駅前に飾り、普段の潤いのない駅前空間に眼を向けてもらおうという企画です。他にも【駅前コンサート】や【清掃活動】、学生の発案による【浴衣を着て盆踊に行こう】や地元飲食店を紹介した冊子【ぐるぐるグルメマップ】の作成などを展開しています。

ハードの活動では講演会や文化講座の開催、アンケート実施、駅前空間の検討や類似地区の視察などを実施し、将来あるべき地域の姿を模索中です。

住民主体の活動は川崎市から高い評価を受け、関心をもつ団体も多く、何度か講演もしました。学生は卒業と同時に活動から離れますが、今年は社会人として再び事務局に復帰して活動の一翼を担う人材も得ました。「楽しく、無理なく、できる事から」を合言葉に今後も皆が本業と両立して活動を続けていければと思います。

地元オリジナルブランド商品の新作販売会：新作の地元オリジナルブランド商品は、毎年、日本女子大学の文化祭（日女祭）開催日に携わった学生自身が販売します

No. 98 Aug. 25, 2014

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒 102-0083
東京都千代田区麹町 2-5-4
第 2 押田ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@LIQL.CO.JP
URL: http://uifa-japon.com
発行 2014 年 8 月 25 日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

被災地通信（9）
Report from the Desaster Area (9):

我が被災地活動 - 声なき声を聞き出し発信したい -
岩井　紘子

Support Activities:Listening to the Silent Majority
IWAI Hiroko

仙台市若林区在住というだけで、どれ程多くの友人知人が心配してくれた事か。生きていた～？！の第一声。有難かったです。即日常生活物資支援品がゾクゾク送られ、仲間への配給手配に奔走する事から始まった我が被災地活動。日々の食糧やガソリン確保に明け暮れしながらも、建築士として応急危険度判定や救済措置制度説明の建築相談員業務のお手伝い、また合間を見て岩手県宮古～宮城県沿岸各地、福島県小高に至る被災３県の現地状況把握と視察、情報収集に動き回り、同時に、本業の倒壊家屋の住宅設計監理業務をこなしていました。次々訪れる建築士会を始めとする様々な日本各地からの被災地訪問ツアーの運転・ガイド、情報提供等率先して行う傍ら、出来るだけ多く学術、支援状況、防災等の講演会参加を試みてきました。

2011 年３月 11 日は、全国法人会女性部連絡協議会（全女連）の 1600 名規模の全国大会 in 仙台を一ヶ月後に控え、100 名ものスタッフによる会場での最終打ち合わせの日でした。帰宅途中遭遇したあの物凄い地震。そこから始まった東日本大震災。無残にも津波に流され残骸となった我設計した住宅、と共に犠牲になられたお施主様ご夫妻、様々なドラマを胸に秘め、確たる将来構想の見えない被災地復興改造論に振り回されて、耐えに耐えてきている被災者の皆さん。1100 日が過ぎました。具体的是といった活動ではないにしても、声なき声を聞き出し、世に発信する作業を自分は今後とも続けて行こうと思っているところです。

2013 年 4 月 28 日、石巻での被災地コンサートの帰り。被害甚大だった東松島市大曲地区の防潮堤で頭を垂れる筆者

■ 会員の本　Member's Publication

『はじめてのマンションベランダ緑化』をつくりました
飯田とわ

Creating a Green Veranda
IIDA Towa

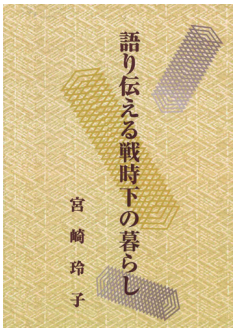
昨年度から江東区の CIG(CITY IN THE GREEN) ビジョン「ベランダ緑化」推進事業のお手伝いをしています。ベランダ (バルコニー) で緑とのふれあいを継続して楽しんでいただき、マンション全体で緑を通じたコミュニティを育んでいただくことを目的に、マンション単位の講習会や合同ナーセリーツアー、報告会等を開催しています。

「はじめてのマンションベランダ緑化」では、簡単な栽培手始め情報と、気をつけていただきたい点等を紹介しています。栽培経験や情報交換を重ねて、植物と、ご近所と、ご自身の居心地のいい距離感をみつけていただきたいという思いを込めながら、ゆるーくまとめました。

区のホームページにも近日公開予定です。

CIG ビジョンについてのホームページ (江東区)
http://www.city.koto.lg.jp/seikatsu/douro/CIG/index.html

『語り伝える戦時下の暮らし』　宮崎玲子著
A Story of Life During Wartime　MIYAZAKI Reiko



「平成になって二十六年、昭和時代で最も大きな出来事だった第二次世界大戦が終わってからすでに七十年近くがたち、その頃の記憶を持つ人々も減りつつあります。」という、書き出しで象徴されるように、昭和一桁生まれの著者が、体験した戦争中の暮らし（一部戦前と戦後の数年を含む）を、次世代に伝えるために記されたものである。

その当時の東京に暮らす一家の周囲に起きた出来事が、生活をしていた人の目線で語られると同時に、「あの時のこの出来事は歴史の中でこういう意味を持っていたのだ。」ということも添えられていて、戦後生まれの人々が歴史の教科書の中で教わった出来事を、当時の人々がどのように感じていたのかが実感できる。

随所に添えられている服装などの挿絵、当時の事物の写真、当時の日本の位置を示す地図等は貴重であり、是非とも若い世代に読みついで欲しい一冊である。

出版社：三協社　2014 年 1 月出版　（宮本伸子）

■役員会報告

2014 年度第 1 回 4 月 25 日　第 60 回海外交流の会報告　「中原邸見学」報告　第 10 回岩泉どこでもカフェ準備　「土浦亀城邸トークショウ」準備
2014 年度総会準備　記念講演会陣内秀信先生に決定、総会資料作成準備
7 月大船渡「囲碁まつり」に「どこでもカフェ」参加準備　NL97 号発刊
第 2 回 5 月 21 日　「土浦亀城邸トークショウ」報告　岩泉どこでもカフェ今後について　総会・記念講演準備　大船渡「囲碁まつり」「どこでもカフェ」打ち合わせ　役員会 2 ヶ月に 1 回開催　世界大会は来年夏ヴァージニア工科大学開催内定　NL98 号編集報告
第 3 回 7 月 24 日　総会・記念講演報告　役員新規メンバー紹介　「また会いましょう岩泉どこでもカフェ」報告　大船渡「囲碁まつり」報告　世界大会に向け第 61 回海外交流の会は稲冨昭氏に講演依頼　NL98 号編集報告

■編集後記

今夏も暑かったですね。今号発行のころにはもう秋の足音が聞こえているでしょうか（飯田）／総会講演を聴けず残念でした。相変わらずワクワク感満載のお話だったようなのに！（石川和）／猛烈に暑いか土砂降りかの今夏、かき氷機を買いました（薄井）。／緻密な取り組みに目を白黒、自分の不注意ぶりが怖いばかりの新人です（神村）／A さんと B さん、B さんと C さん、関係のなかった人がつながることで大きな力になる。ああ地元に居るんだなあと思う。（須永）／先祖への感謝が、個を結び付け、まちづくりを動かしている！今も中世が息づくドイツ・ローテンブルグを訪ねた。（御船）／本号から初参加のヨチヨチ歩きで、何とか付いていってます（宮本）／地域力→地元力がリアリティある感じ！「地元力」↑のために持続的連携！♪「自分力」↑に孫と長話＆水泳♪（渡邉）／田中厚子の本、ぜひカバーをめくりご覧ください。凛とした美しい装丁です（井出 / 編集長）